

## 1824年のサロンにおける風景画 —コンスタブル受容を中心として—

鈴木 一生(成城大学)

1824年のサロンには、《干草車》(1821年、ロンドン、ナショナル・ギャラリー)を含む3点のジョン・コンスタブルの風景画が出品された。この英国画家の作品は、ウジェーヌ・ドラクロワに強い影響を与えたことがしばしば語られる一方、当時のフランスにどのように受け入れられたかが具体的に検討されることはほとんどない。本発表は、コンスタブルに対するサロン評を網羅的に調査するとともに、同年のサロンに出品された歴史風景画への批評と比較することにより、1824年のサロンにおける風景画の状況を確認する。

1824年のサロン評を調査した数少ない先行研究が指摘する通り、コンスタブルの風景画は、ドレクリューズといった保守的な批評家には批判され、スタンダールといった「鋭敏な」批評家には擁護されていた。しかしながらそれらのサロン評は単純に二分されるものではなく、ある種の共通点を持っている。コンスタブルに言及したほとんどの批評は、このイギリス人風景画家の粗い筆遣いに一様に顔をしかめながらも、「真実 *vérité*」に満ちていると称賛しているのだ。これらの批評によると、この「真実」とは、多様な色彩の効果を用いながら、実景と見間違えるような視覚的な「ある種のイリュージョンを作り出すこと」にあった。

これと同様の称賛が、1824年のサロンにおいて、風景画を含むジャンル画の中で最も話題に上がった、聖堂などの内部の様子を描いた内景画 *peinture d' intérieur* に対する批評に見られる。このジャンルで特に言及が多い、ルイ・ダゲールの《聖十字架礼拝堂の廃墟》(1824年)は、当時のパリで大きな話題を集めたディオラマに基づいて制作されたもので、その「イリュージョン」が作り出す「真実」らしさを人々は称賛した。

コンスタブルやダゲールの作品が多くメディアの話題に上る一方、アカデミーで格が高いとされた「歴史風景画 *paysage historique*」に関する記述は決して多くはない。確かに保守的な批評家たちは、当時の風景画派のリーダーと目されたジャン＝ヴィクトール・ベルタンの出品作を取り上げ、その主題の高貴さや、構成の正しさ、線の美しさを称賛したが、いくつかの批評では「様式 *style*」に陥り、「真実」がないことが非難された。ベルタンよりも若い世代であるジャン＝ブルーノ・ガッシが出品した《ロブ・ロイの隠れ家の近く、スコットランドのローモンド湖の眺め》(1824年、個人蔵)では、「歴史風景画」という体裁をとりながらも、主題はもはや古典古代ではなく、その手法もコンスタブルの影響が指摘されている。

コンスタブルの風景画は、1824年のフランスにおいて、芸術としての格の高さというよりも実物に即した「真実」らしさが評価された。若い風景画家たちは、アカデミーとサロンといった公衆の評価に差がある中で、新たな風景画を模索していかなければならなかったのである。